

「能登半島の今 (7)」

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所

田中 千尋 Chihiro Tanaka

能登半島の北部(日本海側)は、輪島市の市街地を除けば、もともと大きな街はない地域です。かつて通じていた鉄道も、輪島と珠洲(すず)---正確には珠洲の先の蛸島(たこじま)---が終点で、日本海側には鉄道がありませんでした。交通は国道や県道のみですが、その道路が震災で寸断され、いわゆる「陸の孤島」になった集落がいくつもありました。産業は主に漁業と製塩で、今でも観光塩田が残っています。



このあたりは行政区画では珠洲市(すずし)になるので、「すず塩田村」という名称です。実際に海水から塩を造る塩田があり、小規模ですが博物館も併設しています。入園料は 100 円でした。



この巨大な塩の塊は圧巻でした。しかしこの塩田で造られたものではなく、海外で切り出された岩塩塊を展示しているようです。このほかにも製塩の歴史や、方法などが資料や映像などでわかりやすく展示され、よく理解できました。



伝統的な製塩には、「流下式製塩法」や「天日製塩法」などがあります。流下式製塩法は、高知の沖の島(宿毛市)で見たことがあります。能登で行われているのは、天日製塩法の一つで、年間の日照時間が比較的長い能登地方に適した方法です。



海水には 3% 強の塩分(主として塩化ナトリウム)が含まれていますが、そのまま煮詰めで食塩を取り出すのは、非常に効率が悪く時間もかかります。そこで、まず砂地(塩田)に海水を撒いて、濃い海水(鹹水/かんすい)をつくるのです。



その鹹水を煮詰めて残りの水分を蒸発させ、塩分を結晶化させるのです。

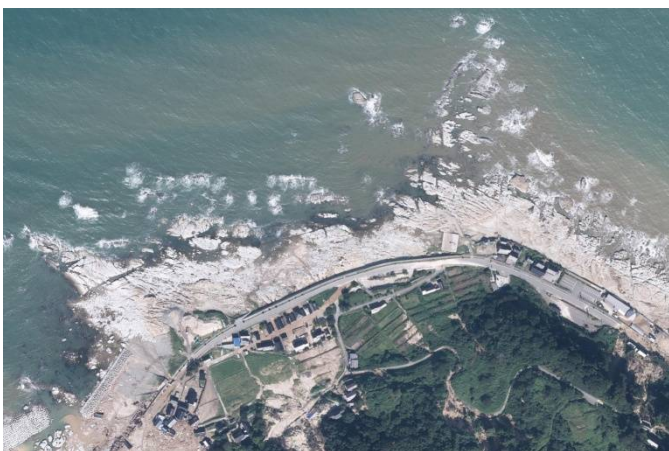


原料は当然日本海の海水ですが、このあたりも震災による隆起を免れませんでした。以前は塩田のすぐそばに海岸があったそうですが、今は沖に移動したので、海水採取も大変になったそうです。



(国土地理院航空写真／震災前)

塩田付近の航空写真を見ても、震災前は海岸線が国道のすぐそばに迫っています。ひもで結んだバケツでも海水をすくえるほどです。



(国土地理院航空写真／震災前)

しかし震災後の航空写真では、隆起によって海岸線が後退しています。建物や道路と比較すると、恐らく20m以上海岸線が後退したようです。



(グーグルマップ／震災前)

震災前の写真を見ると、塩田のすぐ下の海岸線まで、波が打ち寄せているのがわかります。鹿磯漁港や輪島周辺に比べると隆起は小さかったものの、このあたりも1～2m程度の隆起があったのです。



この防波堤も明らかに隆起したあとがわかります。このようになってしまった港湾設備は、どのように修復するのだろうと心配になりましたが、まだ港の修復工事は全く行われていませんでした。



しばらく走ると、能登半島北東端の狼煙（のろし）漁港に着きました。ここには能登半島最古の「禄剛埼（ろっこうさき）灯台」があります。しかし徒歩でしか行けず、更に道もよくわからず、今回は結局行きつけませんでした。